

氏 名 龔 婷

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2470 号

学位授与の日付 2024 年 3 月 22 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 都市平安京の様相——八世紀末から十二世紀初頭までの実  
態を中心に

論文審査委員 主 査 榎本 涉  
国際日本研究コース 教授  
荒木 浩  
国際日本研究コース 教授  
倉本 一宏  
国際日本研究コース 教授  
増淵 徹  
京都橘大学 名誉教授  
渡辺 晃宏  
奈良大学 文学部 教授

# 博士論文の要旨

氏 名：龔 婷

論文題目：都市平安京の様相——八世紀末から十二世紀初頭までの実態を中心に

本論文は、都市平安京の具体的な様相について、平安遷都以前から摂関期までの約三百年の間、都市としての空間構造の変化や都市空間の利用などについて考察するものである。

序論の「問題の所在と本論の視角」においては、先学がすでに行なわれた都市平安京についての研究状況をまとめ、本論文の問題意識を提起するものである。

そして第一部では、「初期平安京の様相」について、平安遷都の歴史的背景となる桓武天皇の即位及び皇統思想に注目し、平安京に表われた国家理念を論じ、さらに嵯峨天皇以降の唐風流行に焦点を当て、平安京に関する文化的な側面を論じるものである。

第二部の「十世紀以降の平安京の実態」では、十世紀以降、摂関期までの平安京の様相について、いくつかの実例を取り上げ、該当期の平安京の実態について解明する。

最後に終章「東アジア諸国の古代都市—中国・日本・ベトナムの比較」では、本研究を開始したきっかけでもある、中国の都城制をモデルとした東アジア諸国（漢字文化圏）の古代都市のあり様について並べて比較し、それぞれの都市の特徴を見出し、東アジア古代都市の全体像を構築することを目指す。

以下は各章の要旨をまとめたものである。

「序論 問題の所在と本論の視角」では、本論文が注目する都市空間の構造や、都市空間の利用、さらに都市で発生する災害などの側面から、これまで都市平安京に関する先行研究をまとめ、本論文が持つ研究上の意義及び位置付けを総括するものである。

「第一部第一章 桓武天皇の即位と平安遷都の前夜」では、平安遷都を行なった桓武天皇の即位前後の政治動向及び即位後に行なわれた長岡遷都・交野郊祀などを手がかりにして、桓武の皇統に対する意識を分析し、平安遷都が行なわれた背景の一つを桓武の皇統意識に求める。桓武は即位後、天皇としての正統性を主張するため、中国の「辛酉革命・甲子革命」に基づいて一連の改革を施行し、のちの平安時代の根本となるものを創出した。

「第一部第二章 平安京の別称考—長安か、洛陽か」では、平安京の空間を語る際に必ず言及される「東京を洛陽城と号し、西京を長安城と号す」（『拾芥抄』）という文言について再検討するものである。平安京遷都以降の一次史料を細かく分析した結果、「左京」「右京」という語の行政用語としての特質を明らかにし、「東京」「西京」は地理空間を強調する用語として頻繁に使われている傾向を見出した。そして平安京に関する「洛陽」「長安」の表現は、白詩を初めとする中国漢文の影響を受け、初見からしばらくの間はただ平安京を文飾する修辞として用いられた。文学表現の域から日常表現への汎用の過程は摂関期に見られるが、のちに「洛陽」が平安京（京都）の別名になったことを論じる。

「第二部第一章 平安京の空間構造—京の空間利用及び内外認識」では、主に平安京の空間の構造及び都市と周辺地域の空間利用に焦点を絞り、時代の変化とともに、律令都城平安京から都市平安京（京都）への空間構造の変化を探っていくものである。まず平安京

内の特殊な空間である境界としての羅城門や禁苑の役割を担う神泉苑に焦点を絞り、それぞれ空間の構造と利用の具体例について論じた。そして範囲を拡大し、平安遷都以降、平安京外部の遊獵地と京の内外区分について具体例を挙げて分析し、天皇・貴族集団にとって城壁のない平安京の内外についてどういう認識をもっていたのかを検討する。

「第二部第二章 平安貴族の新宅・移徙の儀について一敦煌文書宅経との比較研究」では、天皇から貴族まで陰陽寮の指示及び作法に従い、新宅移徙を行なうのは生活に欠かせない儀式である新宅・移徙の儀について、この儀式に関する勘文と敦煌文書 P3281vb「初入宅法」を比較し、内容の比較から中国からの伝来の時期などについて考察した。そして撰関期以降の新宅儀礼の実態を分析し、陰陽師による反関や儀式内容の簡略化、そして女性が移徙の主役である際の作法の変更について、日本独自の解釈として理解すべき見解を出した。

「第二部第三章 平安時代の災異記録―気候と疫病から考える」では、近年、現実の災害問題を目の前にして、平安時代の災害問題、特に平安京が直面した災害の中から、気象災害及び疫病災害を研究対象として取り上げた。古記録の特徴を利用し、記主の通時的記録の内容を分析することによって、気象災害の発生及び政府の対応を捉えることができた。また、疫病の流行の史料を詳細に見ていくと、疫病の流行間隔は周期的なものであり、外国からもたらされた未知なる疫病に対する恐怖より生み出された疫神の思想は、長い間、日本に強い影響を与えた。当時の疫病流行に対する政府の対策は少なく、改元・天下大赦・仁王会・神社への奉幣そして大祓などが平安時代の主流であり、実質的な救済よりも民間の祭祀が勃興するようになったのは、災害の頻発が影響していたと考える。

「終章 東アジア諸国の古代都市―中国・日本・ベトナムの比較」では、中国古代都城を源流とする東アジア諸国の古代都市の特徴を重点的に列挙し、それぞれの国の風土や政治情勢などによる独自性を生み出した理由を探る。また、この比較研究をすることによって、平安京が東アジア諸国の古代都市の中における位置付けを論じ、国際的な視座から平安京を見ることとしたい。

以上の序論、二部及び終章によって、平安京の成り立ちから都市と周辺空間の利用及び災害問題など、平安京を客体としての実態をそれぞれのテーマで論じる。

平安遷都は前の都城である長岡京の造営や土地利用における客観的問題、及び主観的な政治的背景など複雑な背景を持っており、桓武が平安遷都に込める新たな治世への願いは大きかった。桓武朝の変革に続き、嵯峨朝に導入する唐風文化は、白詩などを参照に多くの優れた漢文作品が作られ、文学表現の空間において平安京を洛陽・長安城と重ね、平安京が持つ文化的な側面を明らかにする。

また、平安京の内外空間は時代とともに範囲が変化し、利用の仕方や空間に対する認識も変わり、中世都市京都へ移行する前段階の都市空間の性格を示すものになった。貴族の新宅移徙に関する作法と京内での疫病流行は、それぞれ違った視点から平安京での生活空間の実態を究明し、貴族から庶民まで平安京に生きる人々のリアルな生活状況を解明する。平安京研究においては、すでにさまざまな実態が論じられてきたが、本論は、史料に基づく考証及び異なる視点からの「実態」についての検討の出発点であり、8―12世紀初頭までの平安京のあり様をより鮮明的なものにした。

## 博士論文審査結果

Name in Full  
氏名 龔 婷

Title  
論文題目 都市平安京の様相——八世紀末から十二世紀初頭までの実態を中心に

本論文は、平安時代の内で八世紀末から十二世紀初頭までにおける都市としての平安京の様相について、さまざまな時期の多様な視座から解明しようとしたものである。

論文は二部に分かれ、それに序論「問題の所在と本論の視角」と終章「東アジア諸国の古代都市—中国・日本・ベトナムの比較」が付随している。

序論「問題の所在と本論の視角」においては、先行研究の整理を行なった後に、平安京研究の問題の所在を明示し、本論文の課題と構成を簡潔に提示している。

第一部「初期平安京の様相」においては、造営初期の平安京の政治的背景と、左京・右京の別称について考察し、初期平安京の諸相を明らかにしている。

第一章「桓武天皇の即位と平安遷都の前夜」では、平安遷都を行なった桓武天皇の皇位継承の経緯を分析し、その直系皇統の確立が平安京の造営に及ぼした影響を考察している。

第二章「平安京の別称考—長安か、洛陽か」では、平安京の左京・右京の別称を分析し、左京を洛陽、右京を長安と通称したという定説を批判して、「長安」も「洛陽」も京城全体を表わす修辞であったという新説を提示している。

第二部「十世紀以降の平安京の実態」においては、古記録や古文書を分析・読解することによって、撰関期における平安京の実態を、空間構造、新宅・移徙の儀、災異記録といったさまざまな視点から考察している。

第一章「平安京の空間構造—京の空間利用及び内外認識」では、平安京の空間構造及び都市と周辺地域の空間利用に焦点を絞り、律令都城平安京から都市平安京への空間構造の変化を探っている。特に京城の境界線について考察している。

第二章「平安貴族の新宅・移徙の儀について—敦煌文書宅経との比較研究」では、敦煌文書P3281vb「初入宅法」と藤原師実の「花山院移徙勘文」の比較を通じて、「新宅の儀」の日本への伝来を推測し、また日本での受容に当たり独自の要素が加えられたことを指摘する。さらに古記録の分析による撰関期の移徙の儀の実態を考察している。平安時代における中国儀礼の導入という重要な問題に切り込んだものである。

第三章「平安時代の災異記録—気候と疫病から考える」では、古記録に記された気象災害・疫病などの災異記録を分析し、その政治思想を考察している。特に疫病に対しての朝

廷の対応に関する考察は、当時の政事の本質を鋭く衝いたものである。

終章「東アジア諸国の古代都市—中国・日本・ベトナムの比較」では、中国・日本・ベトナムといった諸国の古代都市を比較し、東アジア世界の中における平安京の特色を国際的に明らかにしようとしている。

以上、本論文は、都市平安京の実態という、これまであまり研究されてこなかったテーマについて、八世紀から十二世紀という長い時間的スパンで総合的に考察し、また古記録の読解や海外史料の分析という手法で考察を行ない、多くの新見解を導いている。

本論文の意義として、まず特筆されるのは、法令や絵図に描かれた観念的な平安京ではなく、古記録という一次史料の分析によって、その実態を探求しようという研究姿勢である。しかも、空間的構造というマクロ的な考察と、京内で生きている人間のミクロ的な考察を、共に成し遂げているという点は、刮目すべきである。

また、都城から見た空間認識という切り口を、奈良時代末から平安時代という五百年にもわたる長いスパンで考察することで、日本古代の認識の変遷を鮮やかに浮かび上がらせていることも、特筆に値しよう。とかく個別のテーマや焦点化した対象の分析に終始しがちな日本史研究において、こうしたスケールの大きさを持って研究を行ない、博士論文を構想することは、その試みにおいて、重要な研究姿勢であると評価すべきであろう。

加えて、この論文が都城論・都市論・空間論・境界論といった様々なテーマに隣接し、または内包している点も、重要な点である。申請者が本論文を基礎として、将来、研究者としてその才能を発展させる可能性を、十分に期待させるものである。

このように、本論文は多くの成果を得たものであるが、まだ不十分な点も認められる。たとえば、全体のまとめが弱く個々の章の論文全体における位置付けが不鮮明であること、日中古代都市の比較対象としてベトナムの事例を入れることの妥当性、史料の性格を厳密に踏まえず利用した箇所があることなど、改善すべき点もあると考える。

しかしこれらの課題は、いずれも申請者の今後の対応で改善できるものである。本論文が都城論や都市論に画期的な飛躍をもたらす可能性を持つ研究であることは疑いない。

なお、申請者は、2024年1月23日に実施された学位論文公開発表会において、多くの質問に対して明確・適切に回答し、それを学術的議論の場での確に展開する能力を十分に示した。申請者は研究者としての資質を十分に備えており、その学力は博士の学位に相応しいものであると判断される。

以上の諸点から、審査委員会一同は、全員一致で本論文を学位授与に相当するものと判定する。